

第1章 昭和59年度京都大学構内遺跡調査の概要

上田正昭 池田次郎 浜崎一志

1 調査の概要

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事の際には、当該部局の報告にもとづき、予定地の埋蔵文化財の調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、試掘、発掘、立合にわけて実施している。昭和59年度は、以下のように、発掘調査3件、立合調査9件、資料整理1件を実施した。

発掘調査	医学部附属病院全身用NMR—C T装置棟	
	新営予定地(病院構内A F 19区)	(第3章, 図版1-141)
	医学部附属病院整備予定地(病院構内A J 19区)	(第1章, 図版1-142)
立合調査	医学部基礎校舎新営予定地(医学部構内A N 18区)	(発掘中, 図版1-143)
	農学部熱帯農学実験研究棟新営に伴う排水工事(北部構内B E 33区)	(図版1-144)
	医用高分子研究センター第2期工事建物新営予定地(病院構内A G 13区)	(図版1-145)
	医学部構内基幹整備工事(医学部構内A M 20区)	(図版1-146)
	楽友会館電気配線工事(教養部構内A L 22区)	(図版1-147)
	工学部建築系教室研究室実験室新営配管工事(本部構内A Z 30区)	(図版1-148)
	農学部総合館北棟自転車置場取設予定地(北部構内B F 32区)	(図版1-149)
	医学部附属病院全身用NMR—C T装置棟	
	新営工事に伴う屋外配管工事(病院構内A F 20区)	(図版1-150)
資料整理	工学部建築系学科校舎新営空調設備工事(本部構内A Y 30区)	(図版1-151)
	工学部工学総合研究センター周辺道路舗装工事(本部構内A V 29区)	(図版1-152)
	理学部プラズマ実験装置室新営予定地(北部構内B F 31区)	(第2章, 図版1-135)

2 調査の成果

前節に記載した調査のうち、昭和59年度に整理を終えた12件について、その成果を時代別に整理して略述する。なお、医学部附属病院整備予定地の発掘調査については本章第3節で、また、個々の発掘調査については第2章以下で詳述する。

縄文時代 北部構内B F 31区で、昭和53年度に実施したB G 31区の調査(図版1-56)〔京大埋文研85〕に引き続いて、縄文時代の低湿地遺跡を発掘した(第2章)。多量の土器、石器のほか、木材、種実、葉、昆虫などの動植物遺体を中心とする自然遺物が出土した。土器の大半は縄文中期と晩期のものであったが、前期末の大歳山式土器も数点出土してい

る。これらの遺物の原位置は、光波距離計とハンドヘルドコンピュータをもちいて記録し〔浜崎84b〕、マイクロコンピュータで遺物の分布状況の解析をおこなった(巻首図版, 図13)。こうした土器、石器や自然遺物の分布状況の解析とともに、森林構成や動物構成の解明と、地形の復原をとおして古環境の総合的な把握を試みた。

病院構内A F 19区では高野川系河川の旧流路の上面から、縄文後期前・中葉の土器が出土した(第3章)。これらの土器のいくつかは遺存状態が良好で、ほとんど磨滅していないことから、流路の埋積時期の下限を示すものと考えられ、高野川系流路の変遷を知るうえで貴重な資料となった。また、岡崎遺跡の西への広がり、この付近に及んでいたことを示す資料としても重要である。

古墳時代 北部構内B F 31区で、碧玉製管玉が3個出土した(第2章)。これらの管玉には共伴する遺物もなく、調査区内から明確な古墳時代の遺物は出土していない。また、管玉の出土した土坑は、その規模や性格が不明であるが、北部構内一帯から散発的に出土する古墳時代の遺物について、今後検討する必要がある。

平安時代 北部構内B F 31区で、平安中期の溝と土坑を検出した(第2章)。溝は北白川扇状地の微高地の上端に沿って掘り込まれていた。土坑からは、土師器と緑釉陶器が出土した。このほか、B F 31区の包含層からは平安前・中期の瓦が出土し、北部構内東南部に比定される吉田寺の北辺に調査区があたっていると考える。

鎌倉時代 北部構内B F 31区で、水田遺構を検出した。北部構内B E 33区でも平安時代末期の水田を検出しており〔泉・三宅86〕、古代末から中世初頭にかけて広範囲にわたり水田開発がおこなわれたことを示し、吉田山北麓一帯の土地利用の変遷を知るうえで貴重な資料である。

室町時代 北部構内B F 31区で、野壺をともしう水田遺構を検出した。文献で人糞が肥料として登場してくるのは14世紀中葉といわれている〔渡辺善83 pp.112-7〕。これらの野壺はB E 33区で検出した野壺とともに、中世の農業技術の展開を知るうえで貴重な資料である。

江戸時代 病院構内A J 19区では、近世の遺物を含んだ大規模な土取り穴を検出した(本章第3節)。病院構内A F 19区では、18世紀の遺物を含む池の西半部を、南北約16m、東西約9mにわたって検出した(第3章)。また、幕末の歌人大田垣蓮月の手による蓮月焼を多数含む土坑S X 1を検出し、蓮月焼と19世紀中葉の良好な一括資料を得た。このほか、19世紀の野壺、柵列、ラチス状遺構など畑作にかかわる遺構も検出した。

調査の成果

3 病院構内 A J 19区の発掘調査

本調査区は、福勝院の比定地の一画にあたる。福勝院は、鳥羽法皇の皇后、賀陽院泰子御願の御堂である。仁平元(1151)年に建立され、九輪阿弥陀堂、寝殿、護摩堂、三重塔などのあったことが知られているが〔杉山62〕, 13世紀の後葉を最後に姿を消し、その退転の状況などは明らかでない。福勝院の位置については、賀陽院泰子の葬送の記事(『兵範記』久寿2(1155)年12月17日の条)より、近衛末に面し、熊野社の北方に比定することができる。その規模は方一町以上とも言われ〔川上77 pp.10-11〕, 教養部の南部一帯から本調査区が、その旧地にあたる可能性があった。ここに病院構内の整備工事が計画されたため、予定地内に、40m×2mの試掘溝を2ヶ所(TR1, TR7), 10m×2mの試掘溝を5ヶ所(TR2~TR6)を設定し、発掘調査を実施した(図2)。

整備工事予定地の地表面の標高は、東北端の50.6mから西南端の50.0mへと、なだらかに下がる。堆積の状況は、以下のとおりである(図1)。まず、南北方向の層位について述べる。予定地東端に設定したTR1では、表土(第1層)は北に厚く南に薄い。南端では地表下約20cmで、中世の遺物包含層にあたる。砂混茶褐色土(第2層)は試掘溝の南半部にしかない。北半部では削平されたと考えられる。主として13世紀の遺物を含むが、12世紀後

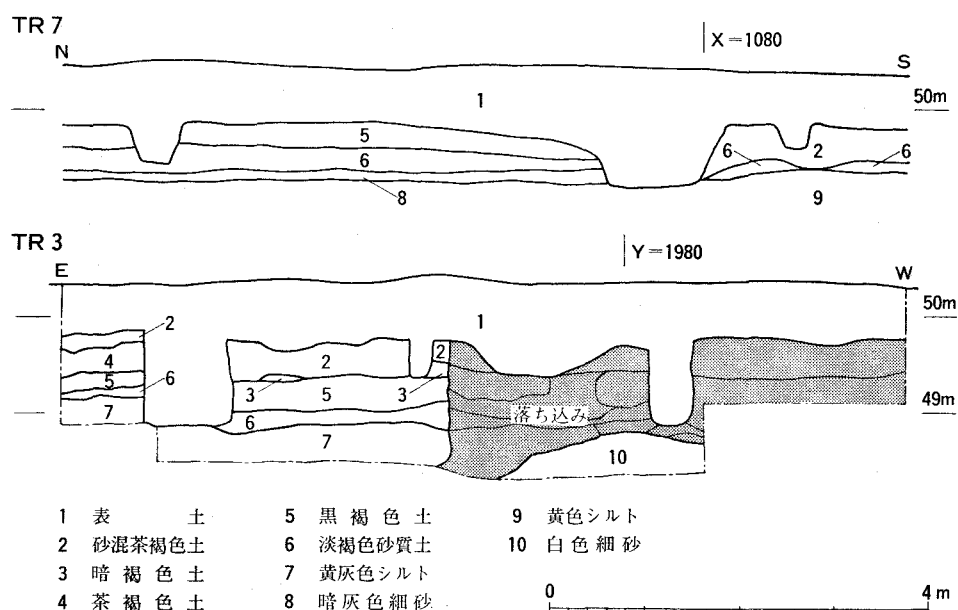


図1 TR7東壁とTR3南壁の層位 縮尺1/80

昭和59年度京都大学構内遺跡調査の概要

葉のものも混じる。黒褐色土(第5層)は、ほぼ水平に堆積し、平安後期の遺物を含む。淡褐色砂質土(第6層)、暗灰色細砂(第8層)、黄色シルト(第9層)は遺物を含まない。

東西方向の層位は、TR 3の層位に代表される。表土(第1層)の下には、砂混茶褐色土(第2層)、黒褐色土(第5層)、淡褐色砂質土(第6層)、黄灰色シルト(第7層)が水平に堆積し、TR 1の層位と基本的によく対応する。しかし、Y=1982付近に垂直に切り立つ不整合面がある。この不整合面は、TR 2～TR 7でも検出しており、整備予定地の中央付近で東から西に垂直に落ち、TR 5の中央付近からTR 6の西で立ち上がる深さ1～2 mにおよぶ落ち込みの存在することが確認された。また、TR 7の北端と南端でも、同様の落ち込みを確認した。これらの落ち込みには、シルトや砂、黒褐色土、茶褐色土が互層となって堆積している。

検出した遺構は、土坑と柱穴、および大規模な落ち込みであった(図2)。中世の土坑は全部で10基で、いずれも12世紀後半から13世紀にかけてのものである。このうち、SK 1、SK 2の2基は集石をともしなう。集石をともしなわない土坑は、TR 7の南端に集中する。SK 16、SK 20、SK 21、SK 22がこれにあたり、SK 16、SK 21が12世紀後半の遺物を

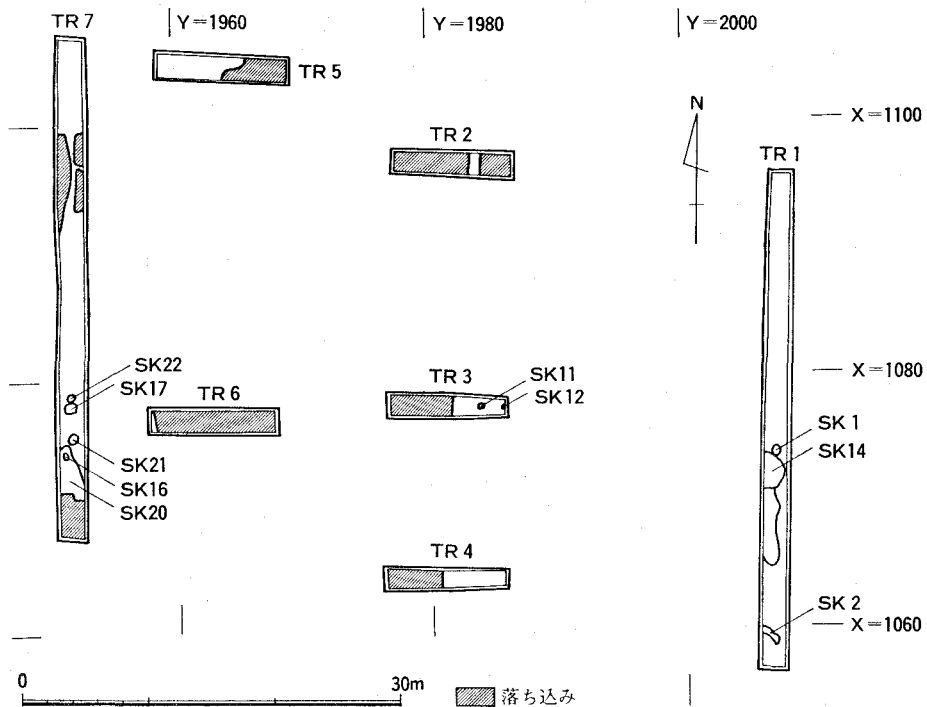


図2 検出遺構 縮尺1/600

含むほかは、いずれも13世紀の遺物を含む。このほか、SK11, SK12は柱穴と考えられる土坑で、底に小児頭大の根石をもつ。

落ち込みはTR2～TR7で検出した。TR2ではY=1983, TR3ではY=1982, TR4ではY=1981付近で、落ち込みの東側の肩を検出した。東側の肩はほぼ一直線で、真北よりやや東にふる。比高は、TR2で2m, TR3で1.2m, TR4で0.8mをはかる。これに対して、TR5で比高1.5mの西に立ち上がる段差を検出した。幅約19mの溝状の落ち込みのあった可能性がある。TR6は試掘溝全体が落ち込みの中にあたった。これらは、埋土の堆積状況から一連のものと思われることや、黄灰色シルトの下面でとまることから、黄灰色シルトを採取の対象とした大規模な土取り穴と考えられる。出土した遺物は大半が12～13世紀のものであったが、少量ながら近世の遺物が混じる。近世の土取り穴による攪乱のため、中世の遺構が破壊されたものと思われる。

遺物は整理箱に28箱分出土し、その大半は中世のものであった(図3)。1～6はSK16から出土した土師器皿。1～3は口径15.0～16.6cmをはかる大型の皿で、口縁部には2段撫でつまみ手法C₄類の調整を施す。4は口径14.0cmをはかる大型の皿、5・6は口径がそれぞれ10.0cm, 8.8cmをはかる小型の皿で、いずれも1段撫で面取り手法D₅類に相当する。12世紀後半の資料と考えられる。

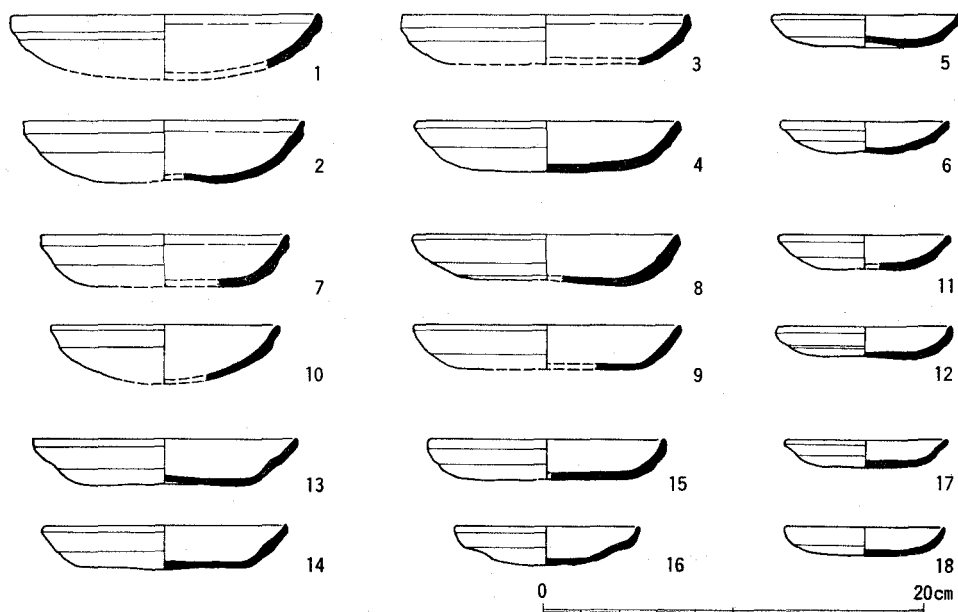


図3 SK16出土遺物(1～6土師器), SK22出土遺物(7～12土師器), SK20出土遺物(13～18土師器)

7～12はSK22から出土した土師器皿。7～10は口径12.2～14.2cmをはかる大型の皿で、7は2段撫でつまみ手法C₄類、8～10は1段撫で面取り手法D₅類に相当する。11・12は口径9.1～9.4cmをはかる1段撫で面取り手法D₅類の小型の皿。口径がやや大きいことから、13世紀でも古い資料と考えられる。

13～18は、SK20から出土した土師器皿。13～15は口径12.5～14.0cmをはかる大型の皿で、1段撫で面取り手法D₅類にあたる。16は体部が外反し、口縁部を幅広く内につまむ小型の皿で、胎土は赤橙色を呈する。17は1段撫で面取り手法D₅類の、18は1段撫で素縁の小型の皿である。いずれも、13世紀の資料である。

以上の土器のほか、竹製品がTR5の落ち込みの埋土から出土した。形態は明らかにできなかったが、籠のようなものと考えられる。

以上の調査で、本調査区一帯には、遺存状態のよい12世紀後半から13世紀にかけての遺跡が存在することが明らかになった。これらの遺跡の消長年代は、福勝院に関する文献資料とよく一致する。本調査区で検出した遺構が福勝院に直接かかわるものと断定できる資料はないが、すくなくとも福勝院の周辺で、この寺に携わった人々に関連する遺構と考えられる。

また、西半で検出した近世の遺物を含む大規模な土坑は、埋積状況や、シルト層の下面で掘削をやめていることから、土取り穴と判断した。土取り穴は、医学部構内のAP19区(図版1-74)、AN20区(図版1-134)、AM19区(図版1-139)でも多数検出しているが、医学部構内のものは14世紀前～中葉にかけてのものである。17世紀の地誌『菟う藝ぎ泥ね赴し』には「河の彦四郎」なる男が熊野社の西で土を掘り、売買していたという話がある。熊野社は本調査区の南約370mにあり、中世から近世を通じて、この地一帯で土の採取がおこなわれていたことや、土取りの中心が中世においては医学部構内であったが、近世には病院構内へと移動したことが判明した。これらのシルトの用途や採取の方法、生業としてのあり方、権利関係などの解明は今後の課題である。

4 構内遺跡とキャンパス計画

京都大学埋蔵文化財研究センターは、埋蔵文化財の調査・研究および保存をその業務とし、発掘調査の結果、埋蔵文化財として貴重であると考えられる遺構には保存措置を提言してきた。その主なものとしては、縄文中期の堅穴住居跡(図版1-123)、縄文後期前葉の甕棺墓と配石遺構(図版1-11)、奈良後期の堅穴住居跡(図版1-75)、奈良時代の石敷製塩

炉(和歌山県白浜町)、平安中期の梵鐘鋳造遺構(図版1-111)、鎌倉初期の火葬塚(図版1-54)などがあげられる〔川上・浜崎84 pp.4-6〕。これらの遺構はその周辺を整備し、標示板を設置するなどの措置を講じ、埋蔵文化財に対する理解を深められるよう努めている。

例えば鎌倉初期の火葬塚の場合、標示板を設置し、庭園の一部として整備している。このため復原した遺構は、大規模建造物の建ちならぶ北部構内の中で、緑あふれる憩いの場として利用されるとともに、ここ吉田山周辺一帯が、古代・中世には鳥辺野、蓮台野とならぶ葬送の地であったという歴史的認識を得る場となっている。

こうした保存の一方で、埋蔵文化財を遺構ごとに孤立した形で保存するだけでなく、遺跡全体をキャンパス空間の中に明示し、遺跡に対する理解と認識を得られるような保存のあり方が求められている。

昭和48年以降実施されてきた組織的な構内遺跡調査により、構内に埋蔵されている遺跡の範囲や時期、その性格などをかなり詳細に把握できるようになってきた。中でも近世の白川道のように本部構内の東端から西端まで復原できたものや、北白川追分町縄文遺跡のようにその範囲を確認することができたものがある。これらの遺跡に対して、教育研究機関である大学独自の視点にのっとり積極的な保存と活用を試みる必要があるといえる。以下に、白川道と北白川追分町縄文遺跡を具体例としてあげ、実験的な保存のあり方を模索してみたい。

白川道 白川道は古代以降、山中越、志賀ノ山越、白川馳道などとよばれ、洛中から現在の京都大学本部構内を通過し、山中をへて、近江坂本へ至る主要道であった。近世には、海運の発達により、その重要性はうすれるものの、近江にぬける手近かな道として利用された。しかし、幕末には尾張藩の藩邸の設置により分断され、その尾張藩の敷地が第三高等学校、京都大学へと引き継がれ、現在にいたっている。

近世の白川道については、遺跡調査の成果〔岡田・吉野80、五十川83〕のほか、文献調査〔浜崎83〕から復原を試みている。近世の白川道は現地表から約60～70cm下にあり、道幅は約3間をはかる。その遺構は大学の建物により寸断されて、往時の白川道をふくめた景観のイメージすらつかめない状態である。この道を現在のキャンパス空間の中に復原するには、いくつかの方法が考えられる。通過車両の速度を抑制するハンプ(盛り上がり)や、カラー舗装や石畳の歩道、花壇や植栽を復原した白川道の形に設置したり、建物により寸断されている部分は建物の外壁に白川道を表現し、そのイメージを視覚的に捉えられるようにするなどの方法があげられる。こうした形で、白川道の跡をトレースすることにより、

昭和59年度京都大学構内遺跡調査の概要

歴史の追体験をおこなうことができる。

北白川追分町縄文遺跡 北白川追分町縄文遺跡は北白川扇状地の扇端部の微高地上にある遺跡である。現在までの調査により、微高地上では縄文中期の堅穴住居跡2棟をはじめ、多くの遺構や遺物が発見されている〔清水84〕。微高地の周辺の低湿地でも、多量の動植物遺体を検出しており、森林構成や動物構成の解明がすすみ、低湿地で検出した人の足跡とともに、当時の古環境と人のかかわりを知ることができており〔京大埋文研85〕、保存整備計画を考えることが必要な遺跡である。

その第一歩はこの遺跡の範囲を明示することにある。植栽を大きく変えたり、舗装を変えることによってその範囲を明示し、遺跡の存在とその範囲に対する理解と認識を得る方法がある。

以上、京都大学構内で確認された遺跡の実験的な保存について述べてきたが、京都大学構内には埋蔵文化財のほかに、近代の歴史を物語る歴史的建造物もある。過密が進み、味気なさの増す構内で、こうした文化財を生かした空間を創造することは今後の課題であろう。こうした文化財の明確な位置付けをおこない、埋蔵文化財と歴史的建造物と新営建物の調和のとれた共存をめざし、全学的視点にのっとったキャンパス計画の策定が望まれる。